



學寄
註解
改正月令博物笥
十月部
二



七火之古史

冬至之日袖式
 糠味噌・法皇外
 未元朝・奉り
 在内之古切を
 嘆之・況之奉り
 主従・糠味噌
 奉り全を造む
 火有
 注し奉り
 探探
 注し火先在袖
 投
 奉り



十月之部目錄

△印ハ俳諧の季
 をり物あり

十月

卦 月好 調子 陰陽
 先三註 十月異名 先三註

大雪

子 冬至

冬至賀

子 陽嘉節

獻履襪

履長賀 履奉る

赤小豆粥食

子

日令

朔 朔旦冬至

曆奏

子 相嘗祭

筑前宗像祭

子 吹革祭

空也忌

子 鉢叩

新玉津島

子 平川祭

春日祭 ○大原野祭 ○園かり神祭
 杜本祭 ○當麻祭 ○當宗祭 ○日祭

吉田祭 ○山科祭 ○平野祭
 梅宮祭 ○中山祭 ○松尾祭

五節帳臺試 △五節舞
 帳臺の試

十月 殿上淵醉 寺	寅中 鎮魂祭 寺	卯中 童女御覽 寺	△日陰髪曼 △山藍袖 △心葉	△小忌衣 △山藍袖 △心葉	酉伊 三島大明神祭 △酉の市	甲子 子祭 △甲子祭 △子燈心	甲中 江日臨時祭 寺	△掛鳥 △鳥かけ	△後日能 寺	卅日 都宇賀祭 寺	卅日 都加茂臨時祭 寺	卅日 親鸞大忌 寺	卅日 都御祭 △春日御祭	卅日 大師講 △智慧講	卅日 坂道陸神祭 寺	卅日 神樂哥 △神提哥	卅日 神樂 △三條御神木 △山神木	卅日 庭燎 寺	卅日 神樂哥 △神提哥
-----------------	----------------	-----------------	----------------------	---------------------	----------------------	--------------------------	------------------	-------------	-----------	-----------------	-------------------	-----------------	--------------------	-------------------	------------------	-------------------	----------------------------	---------------	-------------------

月令

△千歳△早哥△吉々利△星△得銭子△木綿作 △弓立△朝倉△其駒△竈殿哥△酒殿哥 寺	△阿知女 寺	△採物歌 △榊△幣△杖 △條△月△飯 寺	△韓神謡 寺	△大前張 △小前張 △天前張哥の色△寅△木綿美 △難波瀉△前張△階香取	井奈野△脇母古 △小前張哥の色△席枕△雨野 △磯等△篠波△殖槻△総角△大宮△湊田△菘 寺	△山神祭 寺	△曆膏 寺	△袴着 △被初 △帯解 寺	△顔見世足揃 △かき足揃 寺	△歌舞妓顔見世 △顔見世 △顔見世手拵 寺	△綱貫 寺	△雪車 寺	△雪沓 寺	△雪垣 寺	△雪作 寺	△雪吹 寺	△時令 寺	△雪吹 寺	△時令 寺
--	-----------	-------------------------------	-----------	--	---	-----------	----------	------------------------	----------------------	--------------------------------	----------	----------	----------	----------	----------	----------	----------	----------	----------

はれ雪

草

かひ雪

草

雪まほ

草

雪まほ

草

もち雪

草

雪轉

草

雪佛

草

雪佛

草

深雪

草

雪女

草

雪やけ

草

雪明

草

氷柱

草

氷柱

草

電

草

鐘

草

艸木

草

新生姜

草

太山檜

草

冬至梅

草

生類

草

寒苦鳥

草

杜父魚

草

鱒

草

飲食

草

新干蕪

草

干干

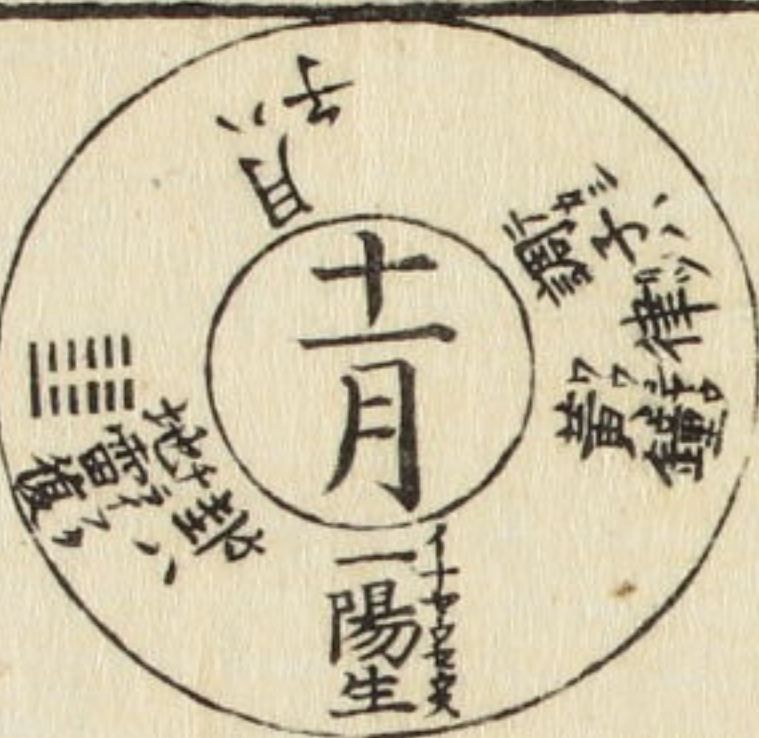
草

澤庵漬

草

十月之部

印ハ俳諧の季
とモノ物々々



十月ハ六陰
生じ陰
ハより當月
中冬至より
一陽來復
なり

○調子ハ黃鐘トハ子の律ト
と月令の注より

○卦ハ地雷復ハ月令ハ雷
發有テ陰氣ハ陽氣を
阿ハざる故ハ聲を發
するの故なり

十月 仲冬。周正。復月。一陽
異名。天正月。暢月。幸月。冬半

和 雪見月。子の月。か
霜降月。霜月。か
露ころり月。雪まち月

異註 仲冬ハ禮記出冬
事ハ周正ハ其要ハ周の世

正月ハ何カなる月ニ有リ△復月ハ謹ニ

一陽来復トる月ナリ△天正月ハ謹ニ

も周の正月ト同シト義カる△暢月ハ禮記ノ註ニ陽久く屈シて後ニ

暢ム△暢月トいふナリ△幸月ハ同シ各註ニ幸ト克ナるト有テ

萬物トく克スるトいふ義なる△陽ト一陽来復トる月也△名づく

○秘藏ニ蔵スる月

莫傳ニ傳スる月

同シ 蔵玉ニ蔵スる月

同シ 蔵玉ニ蔵スる月

同シ 蔵玉ニ蔵スる月

同シ 蔵玉ニ蔵スる月

同シ 蔵玉ニ蔵スる月

同シ 蔵玉ニ蔵スる月

同シ 蔵玉ニ蔵スる月

同シ 蔵玉ニ蔵スる月

同シ 蔵玉ニ蔵スる月

同シ 蔵玉ニ蔵スる月

同シ 蔵玉ニ蔵スる月

同シ 蔵玉ニ蔵スる月

同シ 蔵玉ニ蔵スる月

同シ 蔵玉ニ蔵スる月



大雪ノ節ノ名ニ七十二候ニ艸木七十二候ニ昼夜長短ノ日ノ出入等左ニ記ス

十一月の節
と大雪と
いふと
雨ゲ
寒氣
おこり
かきよう
て雪と
なる月
也大雪と

○鵲ハ雉ニ似テ色黄黒ニ夜鳴テ且ト求ル鳥ナれハ求ム鳥トもいふ

○雀一花ノ事本草も見えす

○虎始交ハ

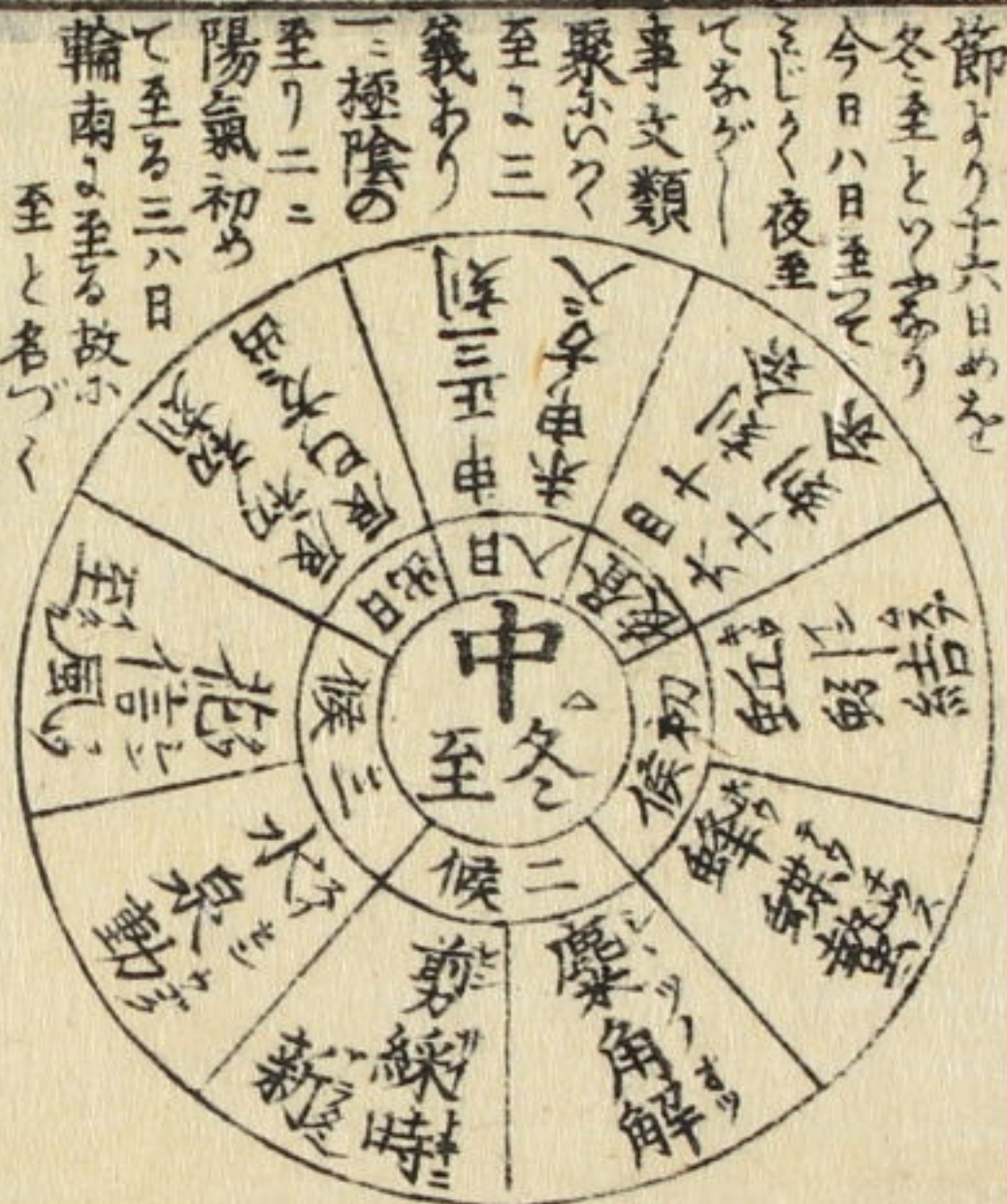
○虎始交ハ

○虎始交ハ

禮記の注は、虎ハ陰物なるも、陽の生
 ずるを感して交るこいつと。○枇杷註
 ちんちん枇杷の花さへの出る。○荔枝出
 とハ瀨ちんちん陽氣よりふのひ
 出る。○松柏秀とハ冬木せぬ松柏かれ
 ども陽氣よりよみされていやく秀る。
節の養生 今月補藥を吞むべし
 尤大熱の藥を服は
 ざるべし。又東南賊邪の風とつ
 ちむべし。是を犯せば病を生じ。

冬至

中の名。七十二候。草木七十二候。
 昼夜長短。日の出入等九小記に



○蚯蚓結ハ禮記の注。蚯蚓ハ正陽の氣に
 感して後お出るもの也。今少しの陽氣生ず
 るも、蚯蚓はさへひびきいてのひぬかちと
 云。○蜂蝶蟄蝶も蜂もいづこ玉と出る。

○麋角解 一陽發るふ達て麋の角さ
 れと落る。○剪綵時 新正に日永よれる
 内婦人の多業も一線やとゆるやふるも、剪
 綵の新さも出来る。剪綵は、細工の事。○水

泉動 陽下小生る故氷たる水も泉もこき切る。
 ○花信風 至諸菜の花を催し風を吹至る。

冬至賀

聖武天皇神龜二年十一
 月天皇大安殿不出御有

て冬至の賀辞を受る云。續日本紀
 朔旦冬至の事ハ朔日の條あり
 冬至の日ハ一陽未復する故ハ一陽嘉節
 とす。唐より今日ハ在京の寔朝服を
 着。一泰内拜賀と。上ハ王候より下
 民間ふける迄酒宴を設け祝ふ。ち
 哥一とらふ君よりひのみ代こわく
 いと長き日のかきうはのらん 為真

非老臣若の浄多う安冬を多か順川
下るる流も流るるも極る冬を多か柳居

詩冬至五字對句

同上

夜向三更靜

一陽方動處

愁添一線長

萬物始生時

詩冬至七字對句

詩礎

岸容待鴈將舒柳

鐘初動

山意衝寒欲放梅

日正融

詩冬至詞

方巨山

至日觀書不幾行梅梢橫月

欲黃昏

漢宮紅影無人見未必曾添

一線長

故事 獻履襪

唐土の婦人冬至の日履と襪と
姑もてまつる是長至と踐の義之

魏の曹植う冬至は襪を獻する

表は曰冬至は履を獻するハ長きを履をまへて

淵鑑類函に見えり

律管灰飛

赤小豆粥

赤小豆粥を食して

赤小豆粥を食して

赤小豆粥を食して

赤小豆粥を食して

赤小豆粥を食して

赤小豆粥を食して

赤小豆粥を食して

赤小豆粥を食して

赤小豆粥を食して

赤小豆粥を食して

赤小豆粥を食して

赤小豆粥を食して

赤小豆粥を食して

赤小豆粥を食して

赤小豆粥を食して

赤小豆粥を食して

赤小豆粥を食して

赤小豆粥を食して

赤小豆粥を食して

赤小豆粥を食して

赤小豆粥を食して

赤小豆粥を食して

赤小豆粥を食して

赤小豆粥を食して

赤小豆粥を食して

赤小豆粥を食して

赤小豆粥を食して

赤小豆粥を食して

赤小豆粥を食して

あまの御魂はくさくさのつらなり 其楚
歳時記に出る

冬 **神農祭** 唐土の人炎帝と
号し百草を治め

て薬を初めたり 医道の祖神
故今日医師祭とをなす

此月田の神と祭事 并神農の
事委しく日本歳時記に出る

冬 **天氣** 冬至より降りく降出し
たる雨ハ晴おそし雲

うららかにありし風をよみ星乃
らしくと見え雨のあがらぬ

冬 **占候** 冬至より北の方より青き雲
あれば来年ハ大よき雲

かきあわしありき氣あればひて
つらき黒きは水は白きと疫病

くゆる黄なるハ火火あり但し
五穀田畑はよし天晴きて暖

むれば来年麥よし冬至の後日
よ土の日あまハひどりあり二日

壬の日あれば早くぬし四日あれば
と豊年六日あれば大水合ふれば

ハ海ひるがむ九日あれば夢夜よ
し十日あれば五穀よしといふ

冬 **養生** 冬至より一陽生して日々
に陽氣生じるとき

内は安く坐してみよし他行は
らば今日房事を慎むべし冬至前

後婚禮より後尚又養生の詩
故事。妙術委しく日本歳時記に出

日令 此部より十月日決定する事
并又支の定する事を出

朔今日世俗小豆飯を喰ふは
日何れかハといふ事

今日冬至は當る時ハ上下とも祝ふ
たと冬至より後とも今日ハ小豆

飯又ハ小豆餅を喰て祝ふは
且ハ唐の共工氏故事に准るも共工

氏の事ハ四丁赤小豆粥の処あり
○今日枸杞汁湯あまされハ不老

朔 朔旦至

今日冬至小當る事と
よふたまく小朔日冬至

よつて天子南殿より出御つる節
會行つる群臣賀表を奉るるや

委しくハ天子俗談といふ本小出づるや
奉るるに主上南殿より

朔 曆奏

今日明年の曆を天子へ
奉るといふ主上南殿より

出御ありて是を御覽ある曆乃
としまるハ欽明天皇十四年百歳の

博士が奉るるや江次第日本紀等出
非曆奏也老の敷盛なりこぼる半窓

五大 住吉新嘗祭。今年の新米を
日 陵 神を奉る事今日あり七日あり

二京 永觀律師忌。東山禪林寺永
日 都 觀堂の開基。天永二年今日寂し

上 相嘗祭

相嘗といふ神を相嘗
小きこしめさる義相嘗

とくきくアイムへと讀む。今日天皇
正禊殿より御幸なりて勅ありて

三輪。住吉。熊野。熱田。廣田。生駒
降劔。大和。津島の大社を祭る

其國の国司を命して其國の宮
倉の初米を供むる先代旧事記出

○延喜式より相嘗祭の神七十聖有
とあり。近頃の絶つると公事根元出

上 宗像祭

筑前国宗像郡
祭神三座延喜式出

○神體は素盞烏のうまひし三女
田心姫。湍津姫。市杵島姫日本紀出

○一説は大和山城にも宗像の社の
ありといふも同躰の社あり

八 吹革祭

懐籥とも書。鍛工楡
荷を祭る此事三條小鍛

治より始る。昔後鳥羽院太刀を
くせめし事を好ませくむひて時の

名工をもを禁裏へめされ十二月ふわ
ちて其月々此番かちをさく免させ

あり其時いまり山の土を取らる
用ひたる故彼鍛冶も度々往來

あり其時いまり山の土を取らる
用ひたる故彼鍛冶も度々往來

していさる山の神を拜せしより
ついにいさをを祭る事とあらむ

○非 北はるくは草祭の自さの地枝
西陽 草祭祭物も休む粟田口

○狂 くのうと風呂てふらの祭
船史 廻るくこそとんあまかした

九京 貴船結神 十京 五條天神
日都 御火焼 日都 御火焼

十 〇今日五加湯又浴まへ
日 〇今日脊又灸とる事を忌む

十 〇京 粟田口神明御火焼あり
日 〇花園院御忌日 京妙心寺小坊

十 〇空也忌 空也堂 京四條坊門堀
日 〇川 有極樂院とふ

〇空也上人の延喜帝第二の皇子を
わつせむか出家とて天録三年

九月十日奥州會津にて往生し
京都より東國へ趣きまへ十月十日

たり御遺言より東國へ趣あふ
日を御忌日とて毎年今日歡喜踊

躍の念佛と修行を坊中の衆俗體
のまけ元平定盛出家とありし

故事委神佛祭祀不出ともし
〇非 遊きし日空也余僧と發 雪山

十 〇鉢叩 空也堂の僧今
日 〇日より四十八日の間洛中洛

外の火葬場と巡りて瓢箪ひょうたん取
たきく高声念佛和讃等を

唱ふ昔ハ鉢をたきくもあべ
〇哥 職人盡哥合

〇非 鉢をたき出さむおれ笑ひ教支考
我門を叩き終るも鉢をき左橋

〇狂 ちあはれくえれハ芋と持
髪を止るるも雪原の袖 信羅

十 〇京 新玉津嶋御火焼 松原通小
日都 有祭神衣

通姫 足利尊氏靈夢よりて
五条俊成卿の屋敷地ハ此祠を

五条俊成卿の屋敷地ハ此祠を

よて即經賢法印と別當と後世ハ季吟又其男代々守るといふ

十大 ○三津八幡宮御火焼
日阪 ○天王寺佛名會音樂有リ

上大 平川祭 平川社奈良の子守町有開化天皇此地

小て四月九日崩すと陵と祭神開化天皇。子守神。住言の神と三坐之季寄

の書ふ此祭年々兩度有とあるして祭ハ此月をかり出は。按ふ此祭四月を行ふと三

枝祭といつ此月の祭を平川といふとす。此祭ハ春日祭のあつる日行る神祇

合ふのころ二枝祭と同一なるをハ四月や、あるべしと公事振元上出

又三枝祭ハ平川をまつて神祇令上出三枝とくは、いふともいふともいふ

○願昭の詠、三枝とハかゝると扇の未廣をハ祝やといふ尚四十二又ハ

春日祭 大原野祭 西園韓神祭 右の祭り春二月と當月とあり

中 日吉祭 近江の国日吉山王祭より四月嚴重の祭あり

四十 杜本祭 當麻祭 當宗祭

申 吉田祭 山科祭 平野祭

卯 梅宮祭 中山祭 松尾祭

右の祭當月と四月と兩度あり能ふハ初めを用ゆる也四月と以冬の景物しとて此月おふる季吟類も句辭するて季と定むといふ

五十 ○大阪の人宮の社御火焼 ○諸国ハ幡御火焼有

中 五節帳臺試 △五節の舞 △帳臺の試

舞姫五人たりはりの儀式あり天子帳臺より出御なりて御直衣

御指貫より御沓をもちて清見原天白王の制、玉ひり事と

いり天皇吉野宮ハ琴を彈きういし時ひりの山と雲をり神女

天降^りて天皇の曲^{まが}み應^{こた}して五
度袖をかへして舞^まするより

五節と名つく。清見原天皇御
宇^み又唐土より昆崙山^{こんろん}の玉と五

まの^つせ玉へ^と其玉間^{たまま}とて^す
事一の玉の光り遠く五十両の車

小至る是を豊^{とよ}の明^{あき}とつて^て天皇は
の川^がもきして御心^{みこころ}と正^{ただ}し琴を

彈^ひく^く小神女空より下^{くだ}り^り回雪^{まわゆき}の
袖をひる^ひか^か下^{くだ}り^りそれとも天^{あま}を^をら^らふして^て

さ^さり^りけ^けは^はかの玉を出^だして^て仙女^{せんじよ}の^の
ら^らを御覽^みじ^じたる^ると云^いふ^ふ源平盛衰記^{げんへいせいざい}に

此説信^{しん}じ^じが^がた^たれ^れども哥^かふ^ふり^り玉
と讀^よむ^むる^るは^はより^り所^{ところ}ある^る小似^せたり

哥^かや^やめ^めとも^もを^をあ^あさ^さひ^ひす^すも^もか^か玉^{たま}を
た^たり^りに^にゆ^ゆき^きく^くた^ため^めあ^あさ^さひ^ひす^すを

古今^{ここん}天^{あま}は^は風^{かぜ}を^をた^たか^かひ^ひら^ら吹^ふく^くと^とも^も
乙女^{おんな}の^のま^まごと^{ごと}ま^まは^はし^しと^とめん^{めん} 宗貞^{むねただ}

續後撰^{つづきごせん}同^{どう}さ^さあ^あを^をた^ため^めの^のま^まの^のう^うか
お^おの^の袖^{そで}も^もひ^ひら^らり^りと^とへ^へつ^つ 実雄^{みのと}

中^{なかつ}殿^{どの}上^{かみ}淵^{ふみ}醉^{すい}

此日五節^{このひごせつ}を^をて^て公卿^{こうけい}
朗詠^{らうぎやう}今^{いま}中^{なかつ}う^うる^る

た^たひ^ひら^らい^い其^{その}後^{のち}乱^{らん}舞^まり^り次^{つぎ}第^{だい}ふ
杓^{しやく}瓜^{うり}を^をま^まく^く北^{きた}の^の陣^{ぢん}を^をめ^めり^り五^ご節^{せつ}所^{ところ}

よ^よつ^つり^り又^{また}取^と々^々小^こ推^お泰^{たい}と^とる^ると^とて^て哥^か
う^うて^てい^いら^らふ^ふ事^{こと}之^の此^{この}事^{こと}正^{ただ}月^{つき}二^に三^{さん}日^{にち}か^かも^も者^{もの}

酒^{さけ}醉^{すい}と^とい^いふ^ふ事^{こと}之^の北^{きた}山^{さん}抄^{しょう}に
非^ひ肩^{かた}脱^{だつ}の^の袖^{そで}ゆ^ゆき^きて^て中^{なかつ}夜^よ上^{かみ}人^{ひと}奔^{ほん}吟^{ぎん}

中^{なかつ}狩^{かり}使^し 今日^{けふ}五^ご節^{せつ}所^{ところ}に^に給^{たま}は^はる^る
雉^{けし}子^こを^を交^ま野^のへ^へ持^もて^てに^に

遣^{つか}は^はさ^さる^る使^しを^をつ^つて^て
哥^かを^を日^ひさ^さに^にて^てよ^よめ^めの^のあ^あら^らけ^けみ^みり^りす^す

か^かた^たゆ^ゆ内^{うち}野^のふ^ふき^きも^もさ^さし^しつ^つ 俊^{しゅん}頼^{らい}
非^ひ乃^のの^の死^しふ^ふを^をあ^あさ^さひ^ひし^し狩^{かり}使^し 嵐^{らん}雪^{せつ}

狂^{きやう}貧^{ひん}乏^{ぼう}の^の持^もれ^れつ^つく^くい^いハ^ハ節^{せつ}季^きめ^め
と^とう^うか^かの^のま^まら^らひ^ひの^のう^う 信^{しん}海^{かい}

中^{なかつ}鎮^{ちん}魂^{こん}祭^{まつり} 人の^{ひと}魂^{たま}魄^{たま}の^のう^うら^らを^を
實^{じつ} 師^しの^のま^まら^らし^して^て身^みれ^れ中^{なかつ}

元^{げん}年^{ねん}十^{じゅう}月^{げつ}宇^う麻^ま志^し麻^ま治^ぢ命^{めい}瑞^{ずい}寶^{ほう}を^を

つんで帝后の御祭らる是はじ
り此神八座宮内省よりあつし代
秀吉公の時吉田山より遷し奉る

⑤ 堀を几巾又ちつておろし 天川

⑥ 新嘗會 △新嘗祭ともいふ
○其年の新穀の初

穂を神小奉らせりて天子御代初
め小行りると大嘗會といひ年毎小行
りると新嘗會と云用明香玉二年四

月より此事始る神代卷より天照太神嘗
嘗見へれば是は神代より有事あり

⑦ 打ひく琴の善し新嘗會 白羽

⑧ 禪林七百首 賢徳の神のすとも
らとてふかちりたりと云へ 御製

⑨ 童女御覽 清涼殿小立童女と
召して天子御覽す

⑩ 是は五節の舞ふつきする事
⑪ 是は河を流れて同じく 月淡

⑫ 豊明節會 前日神供したる
新穀と云ふ天子は也

臣下あもめ故節會行りて

⑬ 御代も清もそのほれき居りか 李坡

⑭ 哥さくしのさき此日新かすつかる
そのほそむり患し 為家

⑮ 日蔭髪 △日かげの糸△心葉△日
かげのつら△又次の小

⑯ 忌衣ハ大嘗會豊明は用ひく
りのせり。日かげの髪ハ蘿まも女

⑰ 蘿まも下り苔といふ俗は狐のえせ
といふ艸を冠す舟なり又日蔭

⑱ の艸をとりて垂るるといふも日かげ
ハ此髪を垂る日の色をいふ

⑲ を薫つ料あり。日かげの糸ハ近代
髪にかりに白糸青糸を組て垂

⑳ ると心葉ハ冠の中子ハ造花を
つるなり今ハ金紙まも白紙より

⑳ 心葉ハ料とらるあり

㉑ 哥續吉今つらふらふそのほれ日かげ
叶いつのせよりちかけはめらん

㉒ 能 赤月や公家お目程の糸もほい 其角

小忌衣 山藍袖 小忌袖 是公豊の明か着する装束

小忌の殿上人といふ。小忌衣の色は白き布を春州又ハ小鳥を山藍おてまうける

哥 くりやなまきをのめれを 俊成女日かけのみく重のう人

非 宿のくまれめりし小忌衣 宗因

中伊 三嶋大明神祭 祭神大山祇

命祭禮の日諸国より商人来りて諸の物を商ふ是を三島酉の市

とつて季々。能因法師西の哥當社へ奉りて事あり

哥 天の川苗代あませきくせあまこりまはれり

能 多とハ林をあらん酉の市 麥永

甲子祭 甲子祭 子燈心 當月子の月故子の日大黒を

祭 多るへ世俗又大黒ハ鼠とつりめと

去あつといつり 二股大根黒米黒豆 なを供へ子の日祭をなほ月

毎甲子ハ祭る之此月ハ子の月故甲子ハ初の子の日と陰

○此月子ハ日燈心を貯めれハ福あり子祭子燈心の事委く論あり面白き事見べし

非 子祭りや 是大黒ハ白大根 鬼貫

狂 滝まきけハ果報ハ子院ハ大

十大 道陸神祭 俗又泥

天王寺村合法辻の辺ハ小き石佛あり此石佛の顔ハ米のことあり

供物を供へ篋ハ蜜柑と噺して踊る是を道陸神祭といふ此祭

の三日前より村中ハ童出て往來の人ハ供物料をもふあつたハ

纏又泥をぬりて人を巻くむ 非 道陸神の中ハ玉芝

狂きまを多れ奉りて元へて乃降神
をり獲りもえまされたり 才流

六十 諸国神明宮御火焼
大阪座六宮御火焼

甲 近江 日吉臨時祭 此祭は八建曆
三年十月七日

勅使を立ちて臨時祭禮行ハ
れるより初る今八中の申此日

八十 京 御霊の 雲居寺淨
都御火焼 蔵の忌日あり

三十 北 〇今日遠方へ行く事なれ病人
見舞事なれ子の年者尤懐

四十 大師講 唐の智者大師今日
寂に依て天台の諸寺此日より今

日 まで大師講と修行も比叡山日光
山等八北日より三言朝まで昼夜法門

有是と論義といふ民間に今日小豆粥
柀柴を折て箸とて是を智恵粥といふ

非 智恵粥や何の宗をも争はば 乙由

六十 北 南 〇春日若宮齊祭又御祭齊催
都ともいふ今日身福寺の僧頭屋

田樂有り長谷川黨神前小奏詰
て野太刀を携へ馬を率是と遍照

院の渡といふ今夜亥の刻過若宮神
明の燈火とけし聲中神體を御

旅所又遷し其後火を上げ音楽等有
非 此祭きててさやせき刀淫 如来

掛鳥 鳥を懸てをり
鳥獸を懸てをり

雉羽兎狸等をり廿日より廿五日
向く春日の神宮此獸を改む是

を獸改めといふ

非 樹を鳥部系禰師の骨を版 静夜

七十 南 都御祭 春日御祭ともいふ
春日若宮の祭あり

若宮の御祭所ハ春日の安宮と
といふ常ハ宮もたなく芝原あり

今日の御祭うまのりれ御殿を
營み若宮を渡御をし奉る毎

年八月十日に此あり御殿の材
木以大和國中より所を之く
例式ふよりく木を伐出し春日
へ奉る九月朔日御繩棟の式例
あり當月廿日ハ神殿の造營
あり廿六日の夜御旅所へ神幸ま
り嚴重の儀式よりく關白殿下
より騎馬の伶人及びつらら子
これ日使といふ御祭崇徳院
の御宇より始るこや

後村上院御製

きけり此や言をまらし春日也ふ
をくまお月も神をまらちり

排神を女と鼻てかむや祭来山

北八日 後日能 今日春日ふ能なり祭
禮の後故も名づく

親鸞大忌 報恩講。面宗
の宗祖親鸞大

ハ弘長二年十一月廿八日小寂以壽
九十歳より故ま廿二日より今日迄

報恩講を修行以俗御霜月と云
排神を消ぬからつまるるも月秀頗

北九條に有此所の
日都宇賀祭 東西の辻と宇賀

の辻といふ倉稻魂神訣ハ博物考に
排神を収めてをいひま附の宇賀祭 山友

下京加茂臨時祭 北祭ともいふ
此祭、寛平元

年十一月より初る。かづり此花取
とりて次身はこれを献じて使符
にけり。む式あり清涼殿不出
御ありて行けるは奉身不出

哥 夫木 季經

排神を消ぬからつまるるも月秀頗
排神を消ぬからつまるるも月秀頗

月令 此部ハ日れきまらるる
十一月の事をしる

御火燒 此月所々の神社にて火を
燒湯を奉る是ハ神樂

庭燎の余風たるべし夫く社まで
行つて日違へりあましまし前くの日の

取よ記に。此月御火焼とるに地中
ある陽氣と追出に訣職時記拾遺

神樂

△東三條御神樂 △山神樂
△里神樂 △昔天照太神

岩戸ふこりし時諸神岩戸の前
あつても庭火をたれ新しむいなる

事有神代まふ出今神樂を行つた
其余風あり故に行つたところ此物

皆神代巻たのまなるへり△東三條
の御神樂下の卯の日といふ昔ハ

東三條重明親王の御宅なり其
辺かたふ両社の神有仁平三年上

月下卯の日神樂派奉らせり
事拾芥抄其外諸番ふ出今ハ絶り

△山神樂といふ禁中内侍取つて
行つたをり△里神樂といふ禁

裏の外神社わく行つたをり

拾遺

触宣

あつたゆけりもことまればさつき
ひらけもそひく出ぬとありは

新古今

貫之

あつたゆけりもことまればさつき
かどやハ人のこめくきつらん

雪玉 詠月前神樂

あつたゆけりもことまればさつき
あつたゆけりもことまればさつき

あつたゆけりもことまればさつき
あつたゆけりもことまればさつき

あつたゆけりもことまればさつき
あつたゆけりもことまればさつき

あつたゆけりもことまればさつき
あつたゆけりもことまればさつき

あつたゆけりもことまればさつき
あつたゆけりもことまればさつき

あつたゆけりもことまればさつき
あつたゆけりもことまればさつき

あつたゆけりもことまればさつき
あつたゆけりもことまればさつき

あつたゆけりもことまればさつき
あつたゆけりもことまればさつき

あつたゆけりもことまればさつき
あつたゆけりもことまればさつき

あつたゆけりもことまればさつき
あつたゆけりもことまればさつき

あつたゆけりもことまればさつき
あつたゆけりもことまればさつき

あつたゆけりもことまればさつき
あつたゆけりもことまればさつき

① 係 松子もあやも 白羽

② 狂 かるも火も照らしも 宿や店
盡りろく 甘い里 神ありな 金山

庭燎 神樂の時焼火。火處焼とい
取々比庭燎を奉るるに神代巻也

③ 哥 堀川百首

公實

天よりる神の心をとらるや
庭火の烟まるとるらん

家集 詠庭火神樂

小弁

ふきくもる庭火のあけ程のまを
んまててや神をきくらん

④ 系 細二あひひし庭燎也 三惟

神樂歌

神提歌

△千歳 △早哥
△吉々利々星

△得銭子 △木綿作 △晝目 △弓立
△朝倉 △其駒 △竈殿哥 △酒殿哥

○右ハ神樂の時々ふんし物の名
神提哥ともりハ千歳の哥ハせんとい

せんといせんといやふとせのせんといやま
さいまさいまといやよろいよのまといや

右の外。早哥。得銭哥。酒殿哥等
小皆々一首づゝ哥有委一々補遺也出

○右の外左ハ記以採物哥。阿知女
神。大前張。小前張等ハ神樂催馬樂

のうへハ物の名いづまも本ナリ然
人倫植物ハハハハハを負徳翁といつり

左誦物名目ばう句ふよてハ本ナリ
くハ神樂の誦物と體ハ聞ハ本ナリ

阿知女 是も神樂の誦物の名ら
し誦多し委しく補遺也出

採物歌 △神幣 △杖 △藤 △弓 △鉤
△校 △鉾 △折 △諸 △拳 △野

是ハ神樂を舞人。さうに。幣。弓。野
なとことまふらして其まふら物的事

を哥ふつてうてうてハ故ふらりの
哥といふ。哥ハ補遺不委しく出

韓神謡 本 こんまよゆらにたり
あけらけらけら林のかうまき

せんちかきまき。末ハひてまよふまも
らしてらけらけらけらまきせんちかき

右の外。早哥。得銭哥。酒殿哥等
小皆々一首づゝ哥有委一々補遺也出

○右の外左ハ記以採物哥。阿知女
神。大前張。小前張等ハ神樂催馬樂

のうへハ物の名いづまも本ナリ然
人倫植物ハハハハハを負徳翁といつり

左誦物名目ばう句ふよてハ本ナリ
くハ神樂の誦物と體ハ聞ハ本ナリ

阿知女 是も神樂の誦物の名ら
し誦多し委しく補遺也出

採物歌 △神幣 △杖 △藤 △弓 △鉤
△校 △鉾 △折 △諸 △拳 △野

是ハ神樂を舞人。さうに。幣。弓。野
なとことまふらして其まふら物的事

を哥ふつてうてうてハ故ふらりの
哥といふ。哥ハ補遺不委しく出

韓神謡 本 こんまよゆらにたり
あけらけらけら林のかうまき

せんちかきまき。末ハひてまよふまも
らしてらけらけらけらまきせんちかき

○ままゆハ伊豆国三島とりの
所より出る木綿ハ紙に
はくる木なりそれを四手ふして
かこまらうり神を祭るゝから
つゝとハ宮内省にまら韓神
二座をヤル名 梁塵愚業抄

大前張 △小前張。是も催馬樂
の識物なり大前張の哥

七首小前張の哥九首有名目はる元
小記に一々哥はれも哥ハ補遺に出入

大前張哥の名 △宮人 △木綿志天 △難波
瀧 △前張 △階香取 △井奈野 △脇母

古 △小前張哥の名 △蒲枕 △開野 △大
宮 △磯等 △篠波 △殖槻 △鯨角 △

湊田 △菘。神樂謡物催馬樂の疾
くりく補遺に出入

山神祭 所々山林にあり事あり
木の上は四手と切こかけ

火と焚祭るをつゝこれも庭燎の
余風なり魚一

曆賣 ① 曆賣は男乃の
さきとに 淡水

髪置 世俗に男女とも三歳より
あれハ十月十五日又ハ吉日

ををくハ髪置纏とて。白髪綿
。松。橘の作は花。末廣扇をハ瓜

童のりくゆひぎりにゆひつけ産
神へ参詣も夕なりその日乃食

膳ハハカナ頭とて。魚菜ハ小右
を膳のちちよ付。是一生さんご

よと齒のゆらゆらんやうよと祝
ふ心とと高貴の御方も三歳

みまやせぬふ時ハ此御祝儀はう
作は花を頭ハゆらも高貴は例ハ

① 河氏葵髪まき団うらむらむら
魚のりくゆひぎりにゆひつけ産

袴着 △袴切 △帯解。紐直。民
家の男子五歳よりある時

ハ此月吉日ををくハ袴着ととま
て基盤のうへま上下を着る

航見世や船舟の火ハ移りたり 凉角
航見世や船舟と乗る里を教 周平

綱貫 つなぬき (能) 経平ややみおきれ
五所の儀 雅有

雪去 ゆき 板より四方をかき箱の
如く作し屋根を後下りか

拵 (北地の人ハ是ふのうて雪の上を
往來する) 箱雪車ともいふ又荷

車くるまの車なき如き形を拵(荷物と
積り雪の上を引ゆく)雪車といふ

○唐の輪りんといふ物ハ板を以て作し
足あしは泥の上を歩行具(手國會出)

哥堀川百首 初はつとゆきうらまはま
りし山紙の落おちるふのこまき

(能) 山紙やまかみを死しをううままややががのの乃 竹夏
ののやや車くるま返かへ車くるま返かへとと素啓

標 めし △標めしとも谷や 右ニ字をりとも又かん
△かかししききのの北地の人あきふふきき雪ゆきの

上あがり歩あゆ行ゆ為なは藤ふじととままててゆゆ丸
ききままんんじじのの如ごとくく作つくりりししつつののうう

そくとそくともも是こををかかんんししききももかかききももまま

(能) 積つるる雪ゆき測はかるる水みづぬぬかかききのの素す啓けい

哥夫木 かぶき かかききくく紙かみのの山やま紙かみ落おちるるも
空あかにに走はつつままぬぬ方かたををかかままかかううと 仲正

雪香 ゆきか 革くわのの啓けい足あし家けのの如ごとくくししきき
ふふくくいい頭あたまままてて及およぶぶのの又

狂袖きやうそでののいいててわわつつししとと雪ゆきのの
ひひももむむささるるももとといいふふ人ひとたり 伊貞

雪竿 ゆきざん 雪ゆき深ふかきき国くにううらら人ひと往い采さいのの
便べんのの馬うまとと竿ざんとと立たてて標めしとといい

哥夫木 かぶき 大炊御門家位
紙かみのの山やまとと雪ゆきののううひひるるななきき

(能) 雪ゆき竿ざんややううらら谷やのの今いまままてても 五樓
雪ゆき竿ざんやや人ひとももとといいふふ菊きくのの後 布門

雪垣 ゆきがき 雪ゆきふふくく国くにいいおおぶぶれれととぬぬぬぬ
ややううにに毎まい年ねんにに雪ゆき垣がきとといい

(能) 雪ゆき垣がきははななれれとと丁ちやうのの住すまいい居い 李郭

時令

又ハ田舎記 乃ハ十月又ハ三冬の季にも用ゆるものなり

雪作

北国ハ雪降るとする時カニラビ雷なり是を雪作と云

雪吹

雪風と書。雪風文と云吹をいふ

雪

雪風と書。雪風文と云吹をいふ

雪

雪風と書。雪風文と云吹をいふ

雪

雪風と書。雪風文と云吹をいふ

雪

雪風と書。雪風文と云吹をいふ

雪

雪風と書。雪風文と云吹をいふ

雪

雪風と書。雪風文と云吹をいふ

雪

雪風と書。雪風文と云吹をいふ

雪

雪風と書。雪風文と云吹をいふ

雪

雪風と書。雪風文と云吹をいふ

雪

雪風と書。雪風文と云吹をいふ

雪

雪風と書。雪風文と云吹をいふ

雪

雪風と書。雪風文と云吹をいふ

雪

雪風と書。雪風文と云吹をいふ

雪

雪風と書。雪風文と云吹をいふ

雪

雪風と書。雪風文と云吹をいふ

雪

雪風と書。雪風文と云吹をいふ

雪

雪風と書。雪風文と云吹をいふ

雪

雪風と書。雪風文と云吹をいふ

雪

雪風と書。雪風文と云吹をいふ

雪

雪風と書。雪風文と云吹をいふ

雪

雪風と書。雪風文と云吹をいふ

雪

雪風と書。雪風文と云吹をいふ

雪

雪風と書。雪風文と云吹をいふ

雪

雪風と書。雪風文と云吹をいふ

雪

雪風と書。雪風文と云吹をいふ

雪

雪風と書。雪風文と云吹をいふ

しら雪

雪が石又ハ木にこぼれ
ふりつりたるを見立

ふる雪とりのりこころうら

非 風終る木くふ雪のつぎは五原

雪神

雪まらけ
雪中の戯まかふる手

非 花やる振返りの影ふもまらけ十振
女房の力多ふやそころう

雪佛

雪達磨
雪布袋
雪兔
雪獅子
雪やて

佛まごの獸の形を作るをいふ

非 雪佛とてくふ凡言司か却し由
司まらけと口も口も口も口も口も

深雪

ふくふくつらつら雪を
いふ

雪女

雪ふくつらつら時ハ雲氣凝
つらつら怪形をいふ

非 はきれ老やむむる女 宝窟

雪やけ

霜やけといふ如く極寒
の節の病の一説ハ病

あはれまらけあつきをいふ雪の
うらといふは同じ雪あけり次はう

雪明

唐の孫康といふ人學字
を好む家を負ふし

油なし雪中ハ夜雪の明りふて書
をよむといふ御史大夫といふ官もある

非 是とも著れはまら雪のうら瓦砾
かゝる書ハ夜とらけをいふ舟子

氷柱

氷水漸く長く
氷筋
氷筍
崖の下に

満る水の氷まらけ山中の樹梢
たつたつらハ凡一抱ふも及べ

哥 雪玉はちけけのうらひの初
尾死さそおおおれ妹うま控

千載ハ雪をいふまらねの床やあれ
ぬんづらなまらけの氷水 經房

非 本との雪をいふまらけハ正種
山のまらけかたけくまらけハ鬼貫

守村の中まらけの音まらけ 布門
松の音まらけつらつら其角

震

雪と雨とまじりて降るといふ
經家

かきくまされけき時夜う那
みまのつるえ山下のをそまら
こひる余るおのさるる 家隆

連水云三巻みそれの名跡宗祇
みそれせ 秋香雪のまは山宗碩
山みそれとあまき物日山周桂

排みくも物結取くころり附支考
客機る跡あまき昔る震るる 其角
らら附のまきそゆくこころこれ山光

狂まけそしねるひくそ出しうこ
とそれのかきのほり合はるし 貞徳

詩 震ノ詞

寒光帶雨山難
イカホドフツテモ
山カ白クナラヌ
サムサガ人カラタニコタ
ヘテオコツタ火モキエヌ

冷氣侵人火失紅
乱撒明珠跳瓦

上 玉がヤ子ノ 輕敵碎玉
ウニトアカトオモハバ

入窓中
サラクトクダナタ玉カ
ニドクハキラヘチウテケル

雷 凡電ハ皆冬の陽をわやま
△(三卷) 夏の際に伏するなり

哥 萬葉集

あはれけりあまをねまはの江に
兼日まをたえれとあうぬうこ

續古今 土御門院

あへく時あまをてはつれあそ
わらむてあつめる相本れ兼

新續古今 定為

あはれ山の中をゆく雲よ風さへく
たくれあまのあまのゆく系

詞 風は 風は 風は 風は
さゆる。風はたゆる。風はさゆる。風
はせよ 雲は ちがひはるる。雲

はるる。雲はちがひはるる。雲は
はるる。雲はちがひはるる。雲は
はるる。雲はちがひはるる。雲は

竹の葉をばしけり音ぞめでたし
 合も物おのほふもむらさき
 〇まきくくる。まきあふる。窓らの
 〇窓うちをさぐる。福のうらみの
 〇まきをさぐる。又ハ萩の枯葉は
 きたゆめかしのよるなり
 旅の推葉。山のこころし。おしは
 〇まきをさぐる。まきは。おまき。まき
 板じし。板や。おまき。おまき
 〇紫の戸。おまきの戸

① 飛散瀝々數十程
 ② 飛散瀝々數十程
 ③ 飛散瀝々數十程
 ④ 飛散瀝々數十程
 ⑤ 飛散瀝々數十程
 ⑥ 飛散瀝々數十程
 ⑦ 飛散瀝々數十程
 ⑧ 飛散瀝々數十程
 ⑨ 飛散瀝々數十程
 ⑩ 飛散瀝々數十程

詩 電ノ詞

林信

飛散瀝々數十程

クニニヨホト 寒風吹面 叵堪行

セカカホコイ 雨流 鞋底 星如 泫

アツテ星ノトフヤウナ 雪落 笠 簷 花 未

成 雪ノヤウニカサノハニカラ

雷 蜥蜴吐

唐土の刈居中と云

小至る大なる蜥蜴 数百あり

長三四尺 此蜥蜴水邊に集り

各水を取る 鱗はひき入ると即

電を吐く 幸 彈丸の如し 俄はし

て地は満つ 忽震雷起りて 電皆

失し去る 明日人來りて 昨干市

中電大まらる云乃 蜥蜴なるは

わがなる所をみる 夷聖志と云り

鐘 鐘の音

鐘の音は霜夜に

① 子 ちの 屋上の 雫れ する ことあり
あつた ぎょうけく ちやあつたらん

② 非 竹 葉と びんごう ちやあつたらん 文慶

○ 鐘の 聲 故事 冬の 十二丁 ちやあつたらん

③ 狂 面白う やほも くらう ことの下 だあり
あつたらん ちやあつたらん 麦 波

艸木

此部 十月の 草木を
あつたらん

新生姜

△ 生姜 堀 ④ 立 戻る こと
あつたらん ちやあつたらん 陽 鳥

太山檜

⑤ 太山 檜 山の 竹 葉
の 苗 ちやあつたらん 常 山

冬至梅

△ 冬至 前後 ちやあつたらん 用 け
一重 ちやあつたらん 八重 ちやあつたらん

⑥ 非 ちやあつたらん ちやあつたらん ちやあつたらん 宗 因
ちやあつたらん 一陽 ちやあつたらん ちやあつたらん 竹 叢

⑦ 艸 木 石 榴 牡丹 山 椒 芙蓉
用 意 竹 芍 薬 右 の 類 ちやあつたらん

⑧ ちやあつたらん 糞 八分 水 二分 ちやあつたらん 竹
ちやあつたらん 蕎 麦 ちやあつたらん 古 屋 根 の ちやあつたらん 菊

の 根 へ ちやあつたらん ちやあつたらん ちやあつたらん

○ 松 杉 檜 柏 桑 紅 花

右の 類 冬至 の 後 ちやあつたらん ちやあつたらん ちやあつたらん
ちやあつたらん 冬至 前 ちやあつたらん ちやあつたらん ちやあつたらん

この 論 並 ちやあつたらん 此 月 草 木 心 得 葉 功
ちやあつたらん ちやあつたらん 委 ちやあつたらん 日本 歳 時 記 小 出

生類

此部 十一月 一ヶ月の
生類を あつたらん

寒苦鳥

一名 鶺鴒 此鳥 日本
ちやあつたらん ちやあつたらん ちやあつたらん 大 三

印度 の 大 雪 山 ちやあつたらん 此鳥 あり ちやあつたらん 夜
寒 を 苦 で 鳴 く 其 声 寒 苦 身

を 責 夜 明 け 八 葉 を 作 ら ちやあつたらん 夜
明 け ちやあつたらん 又 鳴 く ちやあつたらん 日 死 ちやあつたらん

明日 死 ちやあつたらん ちやあつたらん 何 の 故 ちやあつたらん ちやあつたらん
造 て 無 常 此 身 を 安 穩 ちやあつたらん ちやあつたらん

鳴 ちやあつたらん 佛 經 の 説 ちやあつたらん 此 心 ちやあつたらん 哥 ちやあつたらん ちやあつたらん

⑨ 哥 王 葉 集 後 京 極
ちやあつたらん ちやあつたらん ちやあつたらん ちやあつたらん ちやあつたらん

夫木(もろこし)の山(やま)のま(ま)は(は)く(く)き(き)
 竹(たけ)の(の)も(も)め(め)ぬ(ぬ)の(の)り(り)ひ(ひ)る(る) 寂(じやく)連(れん)
 ○平家物語小朝拜の文(ぶん)曰(いは)す
 いづ(い)を(を)お(お)よ(よ)ぶ(ぶ)る(る)さ(さ)ら(ら)し(し)む(む)る(る)を(を)
 苦(くる)む(む)る(る)を(を)さ(さ)ら(ら)し(し)む(む)る(る)を(を)
 よ(よ)り(り)て(て)お(お)り(り)入(い)る(る)水(みづ)も(も)の(の)さ(さ)を(を)
 ふ(ふ)か(か)し(し)む(む)る(る)を(を)さ(さ)ら(ら)し(し)む(む)る(る)を(を)
 他(た)の(の)さ(さ)を(を)さ(さ)ら(ら)し(し)む(む)る(る)を(を)

⑬ 寒(さむ)き(き)を(を)お(お)り(り)入(い)る(る)を(を)さ(さ)ら(ら)し(し)む(む)る(る)を(を)

杜父魚 (つぐろこ) 降(ふ)る(る)時(とき)出(い)で(で)る(る)魚(いし)の(の)り(り)
 魚(いし)も(も)の(の)り(り)入(い)る(る)を(を)さ(さ)ら(ら)し(し)む(む)る(る)を(を)

谷川(やがは)の(の)り(り)入(い)る(る)を(を)さ(さ)ら(ら)し(し)む(む)る(る)を(を)
 此(こ)の(の)り(り)入(い)る(る)を(を)さ(さ)ら(ら)し(し)む(む)る(る)を(を)
 を(を)お(お)り(り)入(い)る(る)を(を)さ(さ)ら(ら)し(し)む(む)る(る)を(を)

鰯 (いわし) 六月(じゅうごく)頃(ころ)小(こ)ま(ま)る(る)時(とき)を(を)ツ(ツ)ハ(ハ)ス(ス)と云(い)ふ
 西(にし)国(くに)に(に)て(て)ワ(ワ)カ(カ)ナ(ナ)カ(カ)ナ(ナ)ク(ク)一(いち)尺(じやく)許(許)あ(あ)る(る)
 の(の)を(を)メ(メ)シ(シ)ロ(ロ)と云(い)ふ十月(じゅうがつ)を(を)二(に)尺(じやく)許(許)あ(あ)る(る)
 を(を)ハ(ハ)シ(シ)と云(い)ふ江(え)東(とう)に(に)て(て)イ(イ)ナ(ナ)と云(い)ふ
 冬(ふゆ)の(の)長(なが)し(し)て(て)ブ(ブ)リ(リ)と云(い)ふ大(おお)き(き)き(き)の(の)り(り)

三四尺(さんじゅうしゆ)あり(あり)よ(よ)う(う)く(く)出(い)で(で)る(る)世(よ)魚(いし)と云(い)ふ
 塩(しほ)を(を)お(お)り(り)入(い)る(る)を(を)さ(さ)ら(ら)し(し)む(む)る(る)を(を)
 ⑭ 千(ち)切(ぎ)り(り)衣(え)解(か)る(る)を(を)お(お)り(り)入(い)る(る)を(を)さ(さ)ら(ら)し(し)む(む)る(る)を(を)
 解(か)る(る)中(なか)居(ゐ)る(る)を(を)お(お)り(り)入(い)る(る)を(を)さ(さ)ら(ら)し(し)む(む)る(る)を(を)

必用 (かならず) 此(こ)の(の)り(り)入(い)る(る)を(を)さ(さ)ら(ら)し(し)む(む)る(る)を(を)

夜九ツ	寅ノ方	夜八ツ	卯ノ方	夜七ツ	辰ノ方
朝六ツ	巳ノ方	朝五ツ	午ノ方	昼四ツ	未ノ方
昼九ツ	申ノ方	昼八ツ	酉ノ方	昼七ツ	戌ノ方
暮六ツ	亥ノ方	夜五ツ	子ノ方	夜四ツ	丑ノ方

破 亥(み)ノ(の)日(ひ)子(こ)ノ(の)日(ひ)亥(み)ノ(の)刻(とき)子(こ)ノ(の)刻(とき)

方向 家(か)普(ふ)請(きん)他(た)行(ぎやう)東(とう)向(かう)の(の)間(ま)方(かた)

樂事 霜(しも)の(の)り(り)入(い)る(る)を(を)お(お)り(り)入(い)る(る)を(を)さ(さ)ら(ら)し(し)む(む)る(る)を(を)

折(ひ)か(か)く(く)の(の)り(り)入(い)る(る)を(を)お(お)り(り)入(い)る(る)を(を)さ(さ)ら(ら)し(し)む(む)る(る)を(を)

此頃のさみしき夜むなしし

養生 山茶花 早梅 太山檀 木

衣襲 黄菊 移菊 龍膽 番

初雪衣 面白 裏紅 荅紅梅 面紅梅 裏紅

天氣 巳午此方の雲ハ風ハ風の後ハ雨ハ北西の風ハ久しく吹

事なし。朔日十九日雨風とつぎど。冬至の後の北風ハ半日一日

あくやむ南風も同然とありまじ南風も雨も多し

占候 雷あれば来春米高し 虹あれば俄に大豆高し

日蝕あれば来年大不作。夏の冷行れば疥癩の病多し

養生 此月つめたる物を枕ふは べつべつ人の目を昏くす

あつちのふん蟹亀の甲 何れものをつくむ人の神氣を

損むる。其外養生の法を委 しく延壽養生論に出し故に略す

飲食 此部ふい十一月の食 物の類をあらわし出

新子蕪 非 豆黄のりかしあつ 豆の黄子 立圃

于大根鈎 香の物大根了を 當月冬至後早く

于張より極寒ふあれを いてあし

澤庵漬製 此漬中ハ沢庵 和尚とよめく

製せられぬ各づく 大根百本 塩三升 糍三升 糠一升

右常のおとく漬るを 糠内五升熬く用也

干菜鈎 干蕪鈎 干菜

干菜鈎 干蕪鈎 干菜

青子菜

大根の葉と雞を煮て
軒をふかけて干す
△(三)

何れ酒

餅米を蒸て酒を
醸したるものを
△(三)

南都の菊屋に製する物名産
常々何れとも名よりの季と云

みづれ酒

あられ酒の少しふ
るものあり
△(三)

用意品

当月菊の雨霞を
さるべし菊の花衛

くおころふ所の上を切べし土
を見立く種をうつく作るべし

委しく菊品といふ本を出る
青柚葉つきのま久しく貯

へる法まの柚葉を金柑を
九年母を其外薬物えずく

貯せり当月製するよし何しの
訣委しく日本歳時記
茶湯料理指南 此二本より

以指南抄の茶湯會席の献立より
平生の料理月々あつて記
十月終

十月飲食 並料理献立

禁 龜 鱉 鴛 鴦 魚 貝 甲 骨 物 魚 乾 物 魚 生 乃

非 生の 菜 又 火 炙 肉 食 べ べ べ

好 雞肉 九月より 此月を食 物 べし 稍補あり ○ 雀肉 冬

食 十月の部 委 十月の部 委 十月の部 委

料 汁 魚 肉 汁 魚 肉 汁 魚 肉 汁

か かさ ころ 葉 玉子 味噌汁

た たこ せき 葉 玉子 味噌汁

膾 さいり 大 さいり 大 さいり 大

さん 玉子 紅いご かん 玉子

清汁

すて貝
ゆまひ

かま
ほぐし

目
小橋

差味

桐
痛うり
つら

鯛
小鯛
大鯛
えんぞす

鯉
こたろ
えんぞす

みま
みま
みま

鴨
あま
あま

煮物

い
かま
かま

かま
かま
かま

雁
あま
あま

生
あま
あま

生
あま
あま

和會物

あ
あ
あ

あ
あ
あ

吸物

あ
あ
あ

あ
あ
あ

玉子
うど
うど

あ
あ
あ

あ
あ
あ

精進汁

あ
あ
あ

あ
あ
あ

新
あ
あ

あ
あ
あ

あ
あ
あ

清汁

あ
あ
あ

あ
あ
あ

差味

あ
あ
あ

あ
あ
あ

大
あ
あ

あ
あ
あ

あ
あ
あ

あ
あ
あ

あ
あ
あ

あ
あ
あ

あ
あ
あ

あ
あ
あ

あ
あ
あ

あ
あ
あ

あ
あ
あ

あ
あ
あ

差味

あ
あ
あ

あ
あ
あ

差味

あ
あ
あ

あ
あ
あ

あ
あ
あ

あ
あ
あ

あ
あ
あ

差味

あ
あ
あ

あ
あ
あ

十月

料士

ぶんごうりや
りまきさんやく
あうりやさん

あひる・かき
あひる・かき
あひる・かき

煮物

大かぶら
らびあん

大かぶら
らびあん

ごうのいも
むつごうす
ねさけ

せんきん
やきふ
あわし

せんきん
やきふ
あわし

なごひとき
やまごり
やまごり

せせいも
まごり
まごり

せせいも
まごり
まごり

和會物

えき
えき

えき
えき

黒くま
あしね
あしね

吸物

きんぎょ
きんぎょ
きんぎょ

時鳥

あひる・かき
あひる・かき
あひる・かき

魚

あひる・かき
あひる・かき
あひる・かき

あひる・かき
あひる・かき
あひる・かき

青物

あひる・かき
あひる・かき
あひる・かき





改正月令博物考
毒部
三